

吉村昭『破船』

片野修

吉村昭の作品としては、『破獄』や『罅』がリアリティーのある名作として知られているが、『破船』も壮絶な話である。貧しい漁村の生活では、魚を獲って売っただけでは生きていけない。男も女も必要になれば村を出て、売られていく。何年か経つと村へ戻って来ることができるが、その間働き続けなければならない。

主人公の伊作は九歳になった。父は三年の年季奉公で港の回船問屋に売られたままであり、伊作は母と弟、妹と暮らしていた。病人は口減らしのために放置されるが、子供は出稼ぎに行くために大事にされる。

漁師の収入源は冬に接岸する尾花蛸と春になってからの大イワシ、イカ、サンマだった。しかし、海が荒れる冬場には村人が待ち焦がれるものがあった。日が没すると、砂礫が広がる浜で砂を入れた平箱に海水を流し込み、それが乾くと大釜に移し、それを薪で炊いて塩をつくる。塩をつくって売るとは村の収入源になったが、夜を通して火を灯すことには、さらに重要な役目があった。

その役目とは「お舟様」を呼び寄せることだった。嵐の海で難破しそうになった船が灯火を頼りに、浜に近づいて座礁する。それを襲って積み荷を自分たちのものにする。そのために夜を徹して火をたくのである。ただし、藩の船を襲えば、村人たちは咎められる。襲ってよいのは商人の船だけだった。

三月の下旬になると、村人たちは今年の豊漁を祈る行事を行う。細い竹を立てた小舟を海におろし、竹の間にはしめ縄が張られていた。男と、子を孕んだ妻が乗り、沖へ出ると妻は着物をたくしあげ、ふくれあがった腹部と陰部を海神にしめす。これを繰り返す間、伊作を含む村人たちは合掌した。最後に男が酒を海面にたらして儀式は終わった。

暖かくなると海は落ち着き、漁に出ることが多くなった。伊作も見よう見まねで魚を獲ろうとし、少しずつ漁獲を増やしていった。サンマは豊漁であったが、どこでも豊漁だったので売れなかった。やがて冬が訪れ、待望の「お舟様」があらわれた。しかも、それは積み荷の多い商船だった。村人は乗組員を殺し、米、綿、油などを略奪し、船は解体して木材として林の中に隠された。米は各家に配分され、少しずつ利用されていく。

一方、積み荷を奪ったことが廻船問屋や役人にばれることは、村にとって死活問題となる。村のおさは豊かになったことがばれぬよう、村人たちには例年と同じように塩を売りにいったり、隣村に男たちを送って、村が疑われていないか探りを入れたりしたが、咎めを受けることはなかった。

次にあらわれた「お船様」には積み荷はほとんどなく、病で死んだ者が乗せられていた。村人はその木材と死人が来ていた赤い衣を略奪した。しかし、このときから村には流行り病が広まり、多くの村人が命を落とした。やがて、伊作の父が年季明けて村に戻ってきたが、伊作の母も兄弟も残っていなかった。

この物語は江戸時代のことだと推察される。平地の乏しい島の漁村では、漁獲物と塩を隣村へもって行って野菜や米と代えてもらう。漁獲がなければ生きていけないので、男も女も身売りして3年あるいは10年、働きに出るが、きびしい使役の中で命を落とすものも多かった。そんな生活の中では、9歳の伊作ですら漁に出て、父の代わりに稼がなくてはならなかった。

日本人の平均寿命は、平安、鎌倉時代で30歳ほど、江戸時代でも40歳前後と推定されている。これは乳幼児の死亡率が高いためであり、なかには藤原道長の妻の源倫子や葛飾北斎のように90歳近くまで生きた例もある。貧しい漁村では、食物が乏しく、口減らしもあって、平均寿命はさらに短かったであろう。

そんな中で、漁民が商船の積み荷を奪い取る行動は違和感なく受け止められるが、あまりに頻発すれば、荷主から疑われる。あくまで難破したように見せかけることと、何年かに1回の頻度で襲うことが必要なのだろう。ちなみに漁民が商船を襲う海賊行為は、現在でも世界各地で行われている。それは言うまでもなく許されない行為である。

現代日本の農村でも、ブドウ、モモ、ナシ、米、マツタケなど、農作物の盗難が尽きない。電線やマンホールも盗まれて換金される。サケ、ナマコ、アワビ、ハマグリなどの密漁も多い。しかし、これらは真面目に働けば食っていけるにもかかわらず、楽に大金をえようとする不法行為である。死の恐怖に支配された極貧の漁村で行われた、止むに止まれぬ海賊行為とはちがうのではないか。

江戸時代の漁民が貧しくて出稼ぎに行き、そこでしばしば命を落とすことは、宮本常一の「海に生きる人びと」でも書かれている。宮本は徹底したフィールドワークに基づいて民俗学を開拓した点で、尊敬に値する研究者である。佐渡島の小木にある民俗学博物館は宮本の提案と支援によってつくられたが、そこに展示されている漁具の数々は驚くほど充実している。その漁具の背景に、貧しい漁民たちの生きざまがあったと思うと感慨深い。

貧しい漁村では、村人たちは一致団結して漁業や塩づくりを営み、祈るようにして難破船を呼び込もうとする。魂の叫びが小説の源であると考えれば、物質的に豊かな現代の日本では、『破船』を超える物語はなかなか書けないのではないかと感じた。

引用文献

宮本常一（2015）海に生きる人びと。河出文庫

吉村昭（1985）破船。新潮文庫